

パーキンソン病について

パーキンソン病は、神経難病の一つで、脳内で神経伝達物質の一つであるドパミンが減少して起こる病気です。多くは、50〜70歳で発症します。有病率は10万人当たり150人で、必ずしもまれな病気ではありません。一般に、パーキンソン病は、運動症状に困り始めてから医療機関を受診されませんが、実は、運動症状が現れる何年も前から、非運動症状が現れています。

非運動症状

- ▽嗅覚の低下
- ▽自律神経障害による症状
 - ・起立性低血圧や立ちくらみ
 - ・便秘や夜間頻尿
 - ・性機能の低下
- ▽抑うつ症状や無関心さ

また、進行すると、認知機能障害や幻覚・妄想が起こります。加えて、睡眠中に突然大声を出したり、手足をバタバタ動かす睡眠時行動異常などもあります。

外見と運動症状

- ▽無表情・仮面様顔貌^{がんぼう}

- ▽前傾姿勢
- ▽筋肉のこわばり
- ▽手・足のふるえ
- ▽特に狭い所での動作緩慢^{かんまん}
- ▽体のバランス障害である姿勢反射障害



パーキンソン病患者の様子

歩行は、第一歩が出にくいくみ足で、手の振りはいすくみ足で、歩幅は狭く小刻みになるのが特徴で、左右で症状に差があります。これらの症状はゆっくり進行しますが、3年や5年で動けなくなることはありません。

治療方法

治療は薬物療法が基本で、脳内に欠乏しているドパミンを増やす薬剤がよく効きます。一方、これらのパーキンソン病症状があっても薬剤が効かないこともあり、その場合は、他のパーキンソン病関連の疾患が疑われるので、改めて鑑別診断が必要で

文責 小島病院

小島敬太郎